

「オンリー・ラヴァーズ・レフト・アライヴ」 (ショート コメント) ★★★

2 0 1 3 (平成 2 5) 年 1 1 月 2 2 日

鑑賞＜G A G A 試写室＞

監督・脚本：ジム・ジャームツシュ

アダム（カリスマ的な人気を誇る何世紀も生き続ける吸血鬼）／トム・ヒドルストン

イヴ（アダムの永遠の恋人、吸血鬼）／ティルダ・スウィントン

エヴァ（イヴの破天荒な妹）／ミア・ワシコウスカ

クリストファー・マーロウ（1 6 世紀末に死んだとされている異端の作家、吸血鬼）／ジョン・ハート

2 0 1 3 年・アメリカ、イギリス、ドイツ映画・1 2 3 分

配給／ロングライド

◆ 第 6 6 回カンヌ国際映画祭コンペディション部門と第 3 8 回トロント国際映画祭に正式出品されたという本作の「売り文句」は、「世紀を越える愛」と「世界で一番、エレガントで美しい吸血鬼、アダムとイヴ」だ。バンパイア映画はいい加減飽きてきている私だったが、そんな売り文句に惹かれて試写室へ行くことに。

確かに、アパートでひっそり暮らすアダム（トム・ヒドルストン）は、アンダーグラウンド・シーンでカリスマ的な人気を誇る何世紀も生き続ける吸血鬼というだけあってカッコいいし、ハンサム。また、その永遠の恋人というイヴ（ティルダ・スウィントン）も美しい。しかし、アダムとイヴがデトロイトにあるアダムのアパートで愛を交わしながら音楽について、また彼らがゾンビと呼ぶ人間たちが犯した歴史上の蛮行について話すシーンの連続は、少し退屈・・・？

◆ 本作のジム・ジャームツシュ監督について、チラシは「『ストレンジャー・ザン・パラダイス』（8 4）『コーヒー&シガレッツ』（0 3）『ブロークン・フラワーズ』（0 5）ほかオフビートなユーモア感覚と秀逸な音楽センスで独自の世界観を築く孤高の巨匠」と表現している。また、プレスシートには、「永遠のアウトサイダーとして生きる孤高の映画作家」「米インディペンデント映画の最大の巨匠と呼ばれ、各界の熱いリスペクトを集めつつも、N. Y. を拠点にメインストリームからは常に距離を置き、マイペースで自分の作りたい映画だけを撮り続けてきた」と表現されている。

そんなジム・ジャームツシュ監督の過去の作品を残念ながら私は一本も観たことがないが、本作を観ればたしかにその独特な世界観を理解することができる。もっとも、それが好きか嫌いかと聞かれたら私はどちらかという・・・。

◆ 評論家の芝山幹郎氏はプレスシートの「趣味も声も良い吸血鬼」という解説の中で、「吸血鬼かゾンビか。どちらかを選べと言われたら、私は迷わず吸血鬼を選ぶ」と書いている。しかし、それはきっと本作のように吸血鬼が美男美女とされているからで、バンパイアが生きていくために人間の生き血を吸うことが不可欠である現実をみると、やはり恐ろしい存在。したがって、所詮バンパイアは闇の世界だけに留まってほしい存在だ。

アダムもイヴもそれを十分理解しているようだから、そうなれば人間とバンパイアの共存が可能だが、破天荒なイヴの妹エヴァ（ミア・ワシコウスカ）になると多少違うようで、ある日ついに人間の男の血に手を出すことに・・・。さらに、バンパイアが清く正しく生きていこうとすると、新鮮な人間の血を手に入れることが次第に困難になるから、本作のラストに向けてタンジールに向かったアダムとイヴの食料源は・・・？

◆ 人間同士の究極のラブストーリーは、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』。そこには悲劇性だけではなく、躍動感も、家同士の対立という生々しさもあるから、ドラマとして面白い。しかし、本作でジム・ジャームツシュ監督が描く、アダムとイヴのバンパイアのラブストーリーは『ロミオとジュリエット』の中に盛り込まれているさまざまな面白みが感じられないから、私にはのっぺらぼうな物語としか思えない。本作に登場してくる音楽はそれなりに興味深いものらしいし、ジョン・ハート演じる老人も 1 6 世紀に活躍したイギリス人の劇作家、詩人、翻訳家であるクリストファー・マーロウらしいが、残念ながらそれも私には十分理解できないから、とにかく本作の面白みはイマイチ。したがって、私は本作に星 3 つしか付けられなかったが、さてあなたは・・・。